

## (2) 「高校の現場からみた高大接続」

岐阜県立揖斐高等学校教諭 国枝 幸徳

こんにちは。岐阜県の揖斐高等学校というところに勤めております、国枝と申します。中部・東海ブロック大学入試検討委員会で20年近く活動しています。

なぜ今、高大接続改革なのかというのは、分数ができない大学生の話題ぐらいからだったと思います。もう1つは、富山県立高岡南高校の未履修問題があったのですが、この未履修問題の背景にある事情が非常に大きいと思います。結局、これは、高校の教育の主体性がどこかで奪われてしまったということの典型的な例だったと思うのです。

### 高校現場での捉え方

受験生が大学入試センターの点数で序列化され、それを元に合格しやすい大学を選び、受験して入学していくという事実があります。大学側が何を言っても、センター試験中心主義になってしまう。国公立大学に受かってほしい親、そして子ども。結局、高校の教員は、それを応援せざるを得ないことになります。大学の先生方に説明しても、分からないとか、そんなことはやめればいいじゃないかと言われるのですが、やはり高校の教員は、親が子どもをかわいがるように子どもがかわいいし、子どもが喜んでくれる顔を見ると、ほっとしますよね。僕もそうだったので、高校の先生方にはそういうところがあるので、どうしてもセンター試験に向かわざるを得ません。

もう1つは、合格者数競争が高校の評価につながってくるというところですね。中部・東海ブロックの大学入試検討委員会が新聞に抗議をして、『中日新聞』などで合格者名の発表をやめてもらったという経緯があります。それから、合格者数を競わせるのはいかがなものかということで、『サンデー毎日』を除き、合格者名の発表を載せなくなりました。しかし最近、『週刊朝日』が頑張って書くようになり、朝日対毎日の取材力競争で、愛知県の牙城であった旭丘高校も結局調べられてしまいました。

前後しますが、履修内容が受験科目競争になっていってしまうというところもあります。私立高校の履修内容が受験科目に特化することになり、それに焦った公立高校が一線を越えたのが未履修問題だったということになるのです。

センター試験は、科目間の平均点の差を許容範囲に押さえなければなりません。例えば地歴公民科で言うと、地理と歴史科目は全然違います。受ける子も違うので、これの平均点が同じになるというのは、そもそもおかしいですね。それなのに教育課程上、センター試験で高得点をあげにくい世界史が必修になるということで、やることは、未履修となってしまいうわけです。

その前後に、高大接続改革に乗り出すということになりました。2013年ですが、Yahoo!リサーチなどでは、今までどおり年1回のセンター試験がいいという答えと、複数回挑戦できる到達度テストがいいという意見が半々ぐらいあり、改革はやむを得ない、するべきなのであろうという声が出ていたと思います。

文部科学省の資料にも、大学入試改革に関する調査結果が掲載されていました。これは大学生対象ですが、大学生も3分の2ぐらいは、改革に関して賛成しているということです。「記述の

ほうが能力を正確に評価してもらえるからいい」とか、「大学で勉強や研究を進める上で必要な力が身に付きそうだから改革がいい」とか、「表現力を付けたい」とか、そういった意味では改革は、待ったなしと言えるでしょう。教育関係者も、大学も、受験をする本人も、大学入試改革に賛成ということです。

実はそういうことはずっと前からありました。中部・東海ブロックの大学入試検討委員会では、これまでの議論をまとめようということで、2008年ごろから、研究のまとめを本にすることを始めました。そこで、さまざまな論議をしました。

センター試験というのは、しっかりと対策を立てれば立てるほど点数が取れる試験であって、学力をはかるには限界があるという見解で一致しました。おそらく高校の先生方は、皆さん納得してくださると思うのですが、先ほど佐々木先生も言われたように、センター試験の問題が悪いとは言っていません。悪いわけではない。よく研究されているテストです。高校の現場の教員にも、悪いと言わない人がたくさんいます。ただし、これは、「生徒を鍛えれば鍛えるほど点数が取れるようになるから、悪いと言わない」、そういう人が多いと、僕は思っています。

もう1つは、推薦入試やAO入試を導入する大学が一気に増えたことで、それに対して、高校の教師というのは非常に面倒見が良いので、生徒が推薦やAOの書類を持ってくれば、とことん面倒を見て、入試のシステムを変えれば変えるほど、教師はその対策に追われ、3年生の後半はまともに授業ができなくなるというようなことが現実になりました。

ではどうしたらいいかということです。もし大学を秋入学にするとします。繰り返しますが、高校の教師は面倒見がいいので、ギャップタームは誰が面倒を見るのだという話になり、高校の教師として、大学の秋入学は無理だという話になりました。

センター試験を廃止するのが一番いいという話もあります。高校の先生方はそう思っていられしゃる方も多いと思うのですが、廃止することに関しては、単科大学の先生方は無理だと言われます。以上のような議論をとおして、非常に軟弱な結論ですが、「受験生の学ぶ意欲をかき立てるような入試問題を出していただきたい。それを励みに、われわれは学習・指導に取り組もうではないか」というようなことになっています。

軟弱は軟弱なのですが、よくよく考えると、今進められてきた改革が本当にうまくいくなら、出来るのではないかと思うのです。要は、生徒の学ぶ意欲をかき立てて、それが評価できる、そういった試験をやるということなのだろうと思うのです。だから、共通試験は年1回でいい、1点刻みのランクづけはやめる。先ほどの佐々木先生のお話に、そうなのだと思いつつ、ランクづけをやめるというのは本当に大事だと思いました。

記述試験を取り入れる。これについて、今の流れでは恐ろしいことが考えられているようで、受験生全部の答案に公平な基準で点数をつけようとしています。だから、非常に労力がかかる、時間がかかるという言い方をしています。私たちとしては、記述の部分は、ある程度の指針だけ提示して、受験する大学へ送ればいいのか。その大学で、もう一回きっちり公平に採点すればいいのか。それでいけば何とかなるのではないかという議論もしました。

もう1つは、個別試験の質を高めるために、大学入試センターに試験問題のデータベースになってもらうということです。けれどもこれに関してショッキングな意見を聞きました。岐阜大学が、優秀な過去問題を融通し合って利用しようという動きを進められたのですが、首都圏のほうでは、

狙う大学の過去問題ではなく、狙う大学とよく似た大学の過去問をしっかりとやろうという指導があるということです。東海で言えば、「静岡大学と岐阜大学では、静岡大学を受けたいのなら岐阜大学の過去問題をやったほうが出る可能性があるよ」ということを、受験生は聞いているようです。こんなことをやられると、本当に困りますね。

### 高大接続システム会議について

先ほどの改革の話ですが、中央教育審議会で高大接続特別部会が始まったのは、2012年9月、民主党政権のときです。月1回のペースで議論が始まり、政権交代直前までは順調に部会が持たれているのですが、2013年1月から4月まで3カ月中断して、5月からさらに半年間中断させられています。その間、教育再生実行会議の第四次提言が出されるのを待たされていたのではないのでしょうか。この提言をベースに最終答申も作られていると、僕は理解しました。

その後、第1回高大接続システム改革がつくられるのですが、明らかに財界主導の高大接続へシフトチェンジをしたような気がします。委員の名簿をよく見ると、初期の部会で、高校生の励みになるような入試制度をつくったらいいのではないかとかと発言されているような人がお辞めになっているイメージを持ちました。

委員のメンバーについてですが、受験産業や、今の改革を進める人にとって都合のいい先進的な教育をやっている方や、いわゆるトップクラスの国立大学の方、それから、東京都立では西高等学校あたりの、最先端のエリート指導をやっている学校の校長先生などが集められて、新たに高大接続システム改革会議として始まったような印象です。

検討が進められているテーマの中で、基礎学力テストというのは面白い発想だと思っています。ただ、非常に注目していたのですが、僕が期待しているのとは反対の方向へ向かいそうです。「調査書を大事にする」ともいっていますが、こういった書類は、どこまで公正にできるのだろうかという懸念があります。学校は個性化を求められますが、評価の為の基準を全部同じにすると、個性化を求めた揚げ句に出来上がってきた書類の評価を、どうするかというのは、ものすごく大きな問題だと思うのです。

僕は学校の外で、「高校生平和ゼミナール」というものに関わっています。学校と全く違うところで、高校生が平和について一生懸命語り合うのです。こういった活動は、誰がどこで評価するのでしょうか。高校生が一生懸命頑張っていることを、本当に評価できるのでしょうか。これは非常に大きな課題だと思います。簡単に、点数化するとか評価するとかいっても、それで入学を決めるとしたら、とてもじゃないけれどもできないでしょう。もしくは、膨大な基準が作られ、その基準のために高校の教師が、今でも振り回されているのにこれ以上振り回されたら、限界を超えるのではないのでしょうか。

では、学習指導はどうするか。受験産業の出番です。公的な資料を作るのを学校に任せ、お金を出して、受験産業である予備校へ行行って勉強して、そして一流大学に行きなさいというようなシステムになりはしないかと、非常に不安なのです。そうすると、お金のない人は、思い切った勉強ができなくなる。だからこそ、お金のある人は受け入れるわけです。そのようなことが、今回の議論の行き着く先ではないかと心配なのです。

多面的な評価検討ワーキンググループの議論のまとめが、最終まとめの前に出されました。こ

れを見ると、「高等学校時代に培った資質・能力に関する妥当性や、信頼性ある多様な情報提供」と述べられているのですが、情報の不公平性をなくすために複雑な評価基準が作られ、生徒は評価を得るために奔走するということになってしまわないのでしょうか。そして今度は、受験産業が評価を得るためのノウハウを提供し、そこに親たちが群がるなどということになってしまわないのでしょうか。評価を分けるのは、親の経済力次第だと。

とにかく、ちょっと喧嘩を売るような言い方になってしまいますが、改革が、優秀な、さらには資金力のある学生を採るためだけの改革になってしまう危険性があるのではないのでしょうか。また、多様な活動を評価するために、多様な活動の場を生徒のために設定していくということが本当にできるのでしょうか。お金を出して、東京へ集まって「高校生何とか会議」ができる場合はいいですが、普通はそうではないですね。自腹を切っていくわけです。それは学校の管理の下ではないので、さらに学校ではつかめない。そんなことで評価されたらたまらないと思うのです。

後期中等教育の本来の目的はどこへ行ってしまふのだろう。人格の形成などどこへ行ってしまふのでしょうか。社会科の「公共」という科目も、僕はすごく懸念しています。公共ということばで、学習内容や目的は察しがつくのですが、高校生のいわゆる青年期を自分の中に落とし込むための学習はどこにあるのだろう。ひょっとして消えてしまふのではないか。そういうことを考えると、非常に心配です。

基礎学力テストと、新たに設計された調査書という学力の設計図を持ち、ポートフォリオの出来がいいから評価するとかではなく、大学がそれぞれ用意する各大学のアドミッションポリシーにのっとった試験、時には大学入試センターの用意する試験でもよいで、それで合否を決めていくという発想は無理なのではないでしょうか。

改革は待たなし。言われるとおりです。試験をどう回していくのでしょうか。基礎テストは1年生時の科目の内容で、2年生で行うというのですが、例えば、僕が勤めている高校でも、テストを受けさせないといけないということで、カリキュラムを慌てて変えました。コミュニケーション英語Ⅰを1年だけでやるのは無理だからといって、1～2年で履修することにしたのですが、そうすると基礎学力テストを受けられないのです。実は、1年で学んだことだけが基礎力ではないはず。今の改革の考え方は、僕には疑問です。もっとシンプルに。多くの高校現場の希望のほうです。もっとシンプルにやってくれ。

それから、まずは受験産業と手を切るべきだと思います。そして、理想論ですが、段階は色々作っておいてよいと思うのですが、大学入試を、達成度テストにするべきではないのでしょうか。この段階ならうちに来ていいよ、ここの段階ならウエルカムですよ、駄目でもいいから、おいでとか、そういう段階があり、そのテストがあって次に、この大学のこういう勉強がしたいのだということを確認して、入学者を決める。

そして、競争ではないので、「この大学に行くと、いろいろなことでかわいがってもらえるから、そっちがいいよ」とか、「君にはそっちの方が向いているよ」というようなことをお互いに言い合って、大学を冷静に選び、そして落ち着くところに落ち着くと。定数は、きっちり決めるのではなく、ゆとりを持たせて、大学側も、採る人数に関してはある程度幅を持たせてもらいながら、大学の中でもその学生に向き合っていくというのはどうでしょうか。

それから、佐々木先生が言われたように、大学間の移動が楽になればいいと思います。この大学では無理だとしたら、これだけ単位を取ったから、ここへ転校させてくださいということも、現実的には可能ですよね。そういったことを考えながら、もう少し時間をかけて、今の大学入試改革や高大接続改革を議論するべきではないでしょうか。今の内容は、拙速というか、まだまだ不十分なところが多いと思うのです。だから、その不十分なところについて、もっと議論を深めて、大学からも高校からも声を上げて、議論をやり直すようなことができないかなと思っています。